

# ピーター・ドラッカーが発見した日本

—日本画の特質を通して—

丸山敏秋（倫理研究所理事長）

日本の志向、日本の特性、東洋の神秘に対する日本の深い洞察力、西洋の力に対する日本の直感的推察力の故に、なかなづく精神的要素こそあらゆる問題を解決する鍵であるとする日本的思考の故に、今後一千年間全世界に君臨すべき新しいタイプの近代的文明人を日本の土地に誕生せしめようとするのが、あるいは天の秘密会議における神意であるかもしれない。（アーネスト・フェノロサ、1892）

## はじめに

昭和の大戦後の占領初期に、「文化」という単語が政治家や知識人などの間で流行した。やがてアメリカ占領軍が持ち込んだ「民主主義」や「民主化」が新聞紙面に大きく現われるようになり、それまでの「文化」とせめぎ合う言葉のドラマが見受けられるようになったという。

ともあれ、新しい「文化国家」を築き直さねばならないという認識のもとで、戦後の日本はスタートした。マスコミがそうしたことを盛んに報じるようになる前、戦時中は不敬罪の罪人だった丸山敏雄（1892～1951）は、1945（昭和20）年9月3日の日記に『夫婦道』起稿。この世界平和と文化建設の大任に入る」と記し、そこから事実上の倫理運動が始まる。その後は短期間だが「文化（新世文化）研究所」が構想され、ささやかな研究活動も行われたのち、1947年秋に生活改善を推進する団体「新世会」が発足する。本紀要を発行している倫理研究所の前身である。

現在の倫理研究所の定款の「目的」の項には、会員が心がけるべき五カ条の「信条」が掲げられている。創立者の丸山敏雄が「新世会」の社団法人（当時）認可申請の際に提出した定款に入れたそれを、ほぼそのまま承けたものである。その第四条は「我等は、日本文化の本質を明らかにし、世界の文化を摂取して、生活の向上に努めます」となっている。これは会員個々が目標とすべき一つであると共に、倫理研究所が取り組むべき事業内容の一つでもある。本稿はこの信条を念頭に置き、日本文化の本質を明らかにする研究の一助にしたいとの思いから起筆する。

日本文化をテーマにした論著がどれほどあるのか、見当もつかない。今後も際限なく書かれていくであろう。あまりにも著名なルース・ベネディクト著『菊と刀』は、長谷川松治の邦訳に「日本文化の型」と、原著にはないサブタイトルが付された。それはベネディクト自身の初期の代表作である『文化の型（Patterns of Culture）』を意識してのことであろう。その通りに『菊と刀』では、日本人の行動および考え方を構造的に把握すべく、豊富なデータをもとに文化人類学的方法で挑んでいる。

そうした、どちらかといえば還元主義的な方法で文化の特質を明らかにするのとは別に、「知覚」による比較対照という手法もある。すなわち感覚的、直観的に捉えた「相似」と「相違」を基軸に、対象を比較対照して特色を明らかにしていく手法である。とくに芸術作品を対象にする場合は、分析・還元的手法では見失われてしまう面が多々あるのを懼れなければならない。

本稿では、日本文化の粋の一角を占める伝統絵画の世界に深く参入し、独自の見識を確立した一人の外国人を採り上げる。それは、世界から「マネジメントの父」「二十世紀を代表する賢人」と讃えられ、さまざまな領域に大きな影響を与え、いまだに愛読者の多いピーター・ファーディナンド・ドラッカー（1909～2005）である。

間違いなく二十世紀の知性を体現したこの人物は、熱烈な日本画の愛好家であり、ただならぬ眼力を有する収集家でもあった。そのことはすでに拙著『つながる』（新世書房、2017）の中でも紹介したが、ここではより詳しく書くことになる。とくにドラッカーが1979年に日本美術展に寄せて書いた論文「日本美術を通して見た日本」を考察のおもな対象とする。彼は日本画の秀作を通して、そこにいかなる日本人の精神性、日本文化の特質を看破したのか。そしてそこにわれわれは、何を学ぶことができるだろうか。